岐阜マザーズコレクションの作品制作とカリキュラムの位置づけ

Making Process of Clothing for Gifu Mothers Collection and the Curriculum

村上　眞知子、平川すみ子
Machiko MURAKAMI and Sumiko HIRAKAWA

Abstract

For the second fashion show, “Gifu Mothers Collection, we use usual classes for researching fashion trends of this year, making mapping board and drawing fashion illustrations from June to July. But as for the pattern making and constructing works, students started their works during summer break. This project was carried out by the 2nd grade students of fashion design and business courses under the leadership of professors of the department. Before beginning of the project they studied about the textile materials, names, characteristic properties and use, basic pattern making and sewing techniques for some clothing items. Thus this project was a good opportunity to connect their knowledge about materials, patterns and sewing for their own design.

In this study, we investigated how these knowledge works effectively for every step of selecting materials, designing the dresses, pattern making and constructing.

Keywords :岐阜マザーズコレクション、ファッション教育、ファッションデザイン専修、カリキュラム

1. はじめに

（社）岐阜ファッション産業連合会青年部との産学協働事業としての「岐阜マザーズコレクション」は今年度で 2 回目を迎えた。昨年の第 1 回は本学と青年部と本学による開催だったが、今年度は本学に加え、岐阜市内にある服飾専門学校 2 校にも声をかけ、産学の連携による地域産業活性化を意識した。本事業の目的とその成果については、平川による報告 [1)]に詳述されているが、大別すると産業界への波及効果と学内における教育効果に分けることができる。本報では、2 年間という限られた学業期間の中で、このような外部団体との協働による事業参画が、どのような教育的効果をもたらすのか、どのような参画の方法が学生のファッションビジネスへの関心とデザインに対する意欲を喚起するのかを検証するために、事業実施後にアンケート調査を行なった。

実際の事業遂行にあたっては、主として青年部が主催者として事業全般を企画し、5 月の打ち合わせ、6 月の素材勉強会と素材内覧会、岐阜県毛織工業組合への生地提供依頼を経て、9 月のファッションショーに至った。

2. 調査方法

アンケート調査は、事業に参加した本学ファッションデザイン専修 2 年の学生を対象として課した実施直後の自由記述による感想文を基本とし、12 月に改めて、以下の項目について 4 段階評価による回答方式で一斉に回答してもらった。設問は、本事業の実施効果として当初設定した目標に対して、どの程度達成できたかを検討できる内容とした。その内訳は、1. 素材（14 項目）、2. トレンド分析（6 項目）、3. パターンメイキング（16 項目）、4. 縫製（14 項目）、5. グループワーク（7 項目）、6. やってよかった点（15 項目）、7. 今後改善するとよい点（10 項目）と、8. 自由記述である。回答は、各設問に対し、「そう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の該当箇所に「○」を記入してもらった。

参加学生 26 名のうち、3 名は個別回答となったが、全員から回答を得た。26 名の学生の内訳は、ファッションデザインコース 13 名、ファッションビジネスコース 13 名である。前者は、2 年次に「ファッション造形演習Ⅲ」、「ドレーピングⅡ」、「CAD パターンメイキング演習」など制作系の科目を中心に履修している。これに対し後者は、「ファッショントレンド研究」、「セールスプロモーション」など企画系の科目を中心に履修している。しかし、両者とも、1 年次においては「ファッション造形演習Ⅰ」、「同Ⅱ」で制作の基礎を、また「生活材料学」、「生活材料管理学」や 2 年次前期に開講される「テキスタイル素材演習」、「テキスタイル染色演習」などの素材、染色系科目および「パターンメイキング論」は基本的な必修科目として全学生が履修している。「ドレーピングⅠ」に関しては、ファッションデザインの必修、ファッションビジネスの選択科目として、どの学生にも履修の機会があったが、20 人が

履修していた。今回の事業に関するアンケート調査では、これらの科目履修環境において、それぞれの科目でどのように知識を得、それが実際のファッションビジネスを模しているともいえる事業展開の中で、どのように活かされているのかを検証した。

3. 結果と考察

3.1 素材

表1は、素材に関する設問とそれに対する回答結果を示す。平均値は、「そう思う」に 4、以後順次「そう思わない」に1を割り振り、それぞれの回答数を乗じた和を回答者数で除した。また、「思う」欄の値は「そう思う」と「ややそう思う」の、「思わない」は「あまりそう思わない」と「そう思わない」の回答数合算値を示す。①③⑥は、繊維名、織布と編布の違いとそれぞれに属する生地名称など衣服素材に関連した名称の理解に関する設問である。事業の進行やファッションビジネスの現場において、素材名称は企画部門と、デザイナー、パタンナー、縫製加工の各部門間のコミュニケーションにとって必要不可欠の基礎知識である。①で、「繊維名、織物名、編布と織布の違いや名称を理解できた」と 19 名が、③では、「『生活材料学』で学んだ知識を活かすことができた」と 20 名が回答しているが、⑥の「繊維、織物、編布素材の名前を言われてもわからなかった」では、「そう思う」1 名、「ややそう思う」14 名との回答が 58%に達し、素材知識に関して確実に理解し、判断できるまでには至っていないことが伺える。さらに、④⑤⑦⑧⑭は、素材特性を理解したうえで、実際のデザインに活かすことができたかに関する設問である。平均値の大小が「そう思う」の回答の多少を示すが、⑭の他は「思う」が 81～92%と、今回の事業で、デザイン決定と素材選定が有効に機能した結果と考えられる。ただ、通常の制作活動の中で、学生は生来の感覚である程度適した素材の選択ができることもわかっている。しかし、それが単なる感性やフィーリングではなく、科学的な根拠に基づいた選択であることへの導入は必要である。一方で、⑭の「扱いにくい生地を選んでしまった」に対する回答については、素材の外観、目新しさなどで選んだが、実は織りが甘く糸が落ちやすい、分厚すぎる、特殊な編構造を持っているなどの取り扱いにくさが裁断、縫製段階に入ってわかったということの結果だと思われる。

マザーズコレクションでは、前回と同様、青年部からは、岐阜アパレルで実際に使用している生地を使って欲しいという希望が強く出された。またその結果として、青年部から多くの生地が持ち込まれた。しかし、学生のトレンド研究をベースとしたデザイン提案の段階では、これらの素材の色傾向、素材傾向からなかなか採用に至る素材を見つけることができなかった。一方、素材の地産地消の観点から、またトレンドとしての羊毛素材の嗜好傾向から、岐阜県毛織工業組合の協力を得て素材提供を受けた。学生が、同組合へ赴き、デザインとの整合性を確認しながら素材選定を行なう機会を設けた。しかし、同組合から提供してもらえる生地要尺は基本的には、「着分切り」された素材が殆どである。設問②⑩⑪⑫⑬と⑦は以上のような素材提供の現状を反映している。青年部の希望を全面的に受け入れることは、マザーズコレクションの前提として、現在の問屋町、あるいは岐阜アパレルの商品傾向、商品企画を受け入れることとなり、学生の若い感性で企画する中高年世代のデザイン提案とはかけ離れてくる。本来なら、自由な素材選定が望ましいが、様々な制約の中での実施はある程度やむをえない面もある。しかし素材提供機関を増やすなどして、素材の多様性、色柄の多様性、生地量の確保に努力が必要である。

3.2 ファッショントレンド分析

トレンド分析に関しては、主としてファッションビジネスコースの学生が中心となって、専門教育科目「ファッショントレンド研究」のグループ演習として実施したが、6月の4コマの授業においては、ファッションデザインコースの学生も授業に参加した。授業では、(1)トレンドテーマをターゲットにあわせて落とし込む、(2)落とし込んだテーマにあわせ、トレンドカラー、素材、シルエットをターゲットにあわせ展開し、マップ制作、デザイン決定、デザイン画作成に作業を進めた。学生にとっては、素材知識を深め、かつ実際の企画、デザインで使える能力を養う上で、また自分たちとは異なる年齢域のデザイン、制作を通じて、多様な志向性、体型を理解するまたとない機会である。

表2は、トレンド分析作業の過程における設問と回答を示す。学生にとってトレンドを分析し、実際の企画に落とし込む作業は初めての経験で、決して容易なことではなかったと思うが、①「トレンドテーマを決めるのに迷った」に関しては、授業での成果もあり 50%以上の学生がそう「思わない」と回答している。しかし、実際にテーマを決める、素材を決める、デザインを決める段階に至ると、②「テーマを決めていく過程(テーマ、カラー、素材、シルエット)が難しかった」に関しては 70%の学生がそう「思う」と感じており、難しさを感じつつも、前述のような素材選定の制限もある中で、③「トレンド分析の結果を素材

表 1. 素材に関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	繊維名、織物名、編布と織布の違いや名称を理解できた	2.96	19	7	6	13	7	0
②	羽島マテリアルセンターの活用が役に立った	3.42	23	3	14	9	3	0
③	生活材料学で学んだ知識を活かすことができた	3.08	20	6	8	12	6	0
④	素材物性(かたい、やわらかい、ドレープ、など)を、シルエットに活かせた	3.50	24	2	15	9	2	0
⑤	作りたいシルエットに対してどのような素材を選択すべきかわかった	3.27	24	2	9	15	2	0
⑥	繊維、織物、編布素材の名前を言われてもわからなかった	2.58	15	11	1	14	10	1
⑦	自分の決めたテーマに合う素材を見つけるのが大変だった	3.04	21	5	8	13	3	2
⑧	素材にあった縫製条件(アイロン温度、糸の太さ、針の太さ)を理解できた	2.96	21	5	5	16	4	1
⑨	衣服アイテムの名称を理解し覚えることができた	3.42	25	1	12	13	1	0
⑩	使いたい色柄の生地が手に入らなかった	2.65	14	12	6	8	9	3
⑪	集められた生地の色傾向が偏っていた	2.77	15	11	6	9	10	1
⑫	集められた生地の素材(羊毛、綿など)傾向が偏っていた	2.69	16	9	4	12	8	1
⑬	使える生地量が少なすぎた	2.81	17	9	5	12	8	1
⑭	扱いにくい生地を選んでしまった	3.04	17	9	12	5	7	2

表 2. トレンド分析に関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	トレンドテーマを決めるのに迷った	2.38	12	14	2	10	10	4
②	テーマを決めていく過程(テーマ、カラー、素材、シルエット)が難しかった	2.88	17	8	10	7	6	2
③	トレンド分析の結果を素材選定に反映できた	3.08	18	8	11	7	7	1
④	マップ制作を通して企画をアピールする方法が身についた	2.96	21	5	7	14	2	3
⑤	マップとデザイン画が一致していた	3.31	22	4	12	10	4	0
⑥	トレンド分析の結果をデザイン画に反映できた	3.15	21	5	9	12	5	0

表 3.　パターンメイキングに関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	造形演習、パターンメーキング論での知識や技術を活かすことができた	3.44	24	2	10	14	2	0
②	ドレーピング演習の知識や技術を活かすことができた	2.52	12	13	6	6	8	5
③	中高年の体型の特徴を知ることができた	3.64	25	1	14	11	1	0
④	中高年の体型のパターンメーキングが難しかった	3.84	26	0	18	8	0	0
⑤	正確なパターンメーキングの必要性が理解できた	3.72	24	2	17	7	2	0
⑥	シーティングの扱い方を再度学べた	3.80	25	1	18	7	1	0
⑦	地の目の重要性を再認識した	3.80	26	0	17	9	0	0
⑧	トワールのマーキング、トレースを正確に行なった	3.40	23	3	10	13	3	0
⑨	平面と立体の関係を理解できた	3.32	22	3	11	11	3	0
⑩	体型に合う人台の調整に時間がかかった	3.19	20	6	13	7	4	2
⑪	工業パターンの展開(布厚みの計算、いせの配分など)が理解できた	2.92	20	6	7	13	3	3
⑫	切り替えが複雑過ぎた	2.23	7	19	4	3	14	5
⑬	素材の特性をパターンに反映した	3.00	18	8	8	10	8	0
⑭	作りたいシルエットをパターンに表現できた	3.19	23	3	9	14	2	1
⑮	教員の指導が理解できた	3.19	24	2	7	17	2	0

選定に反映できた」では、70%の学生がトレンド分析の結果を素材選定に反映できたと回答している。

また、以上の結果をマップという形でまとめ、それに基づいてデザイン画を完成させる過程においては、④⑤⑥の結果で、平均値にやや差はあるものの、80%以上の学生が満足のいく成果を見出している。

3.3　パターンメイキング

パターンメイキングは、今回の一連の作業の中では最も時間と労力を費やした。「ファッション造形演習」や「パターンメイキング論」、「ドレーピング」といったカリキュラムの中で経験を積み重ねてきている領域である。表 3 は、パターンメイキングに関する設問と回答の結果を示す。

表 4.　縫製に関するに関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	造形演習での知識や技術を活かすことができた	3.50	25	1	15	10	0	1
②	いろいろな部分縫いの知識が深まった	3.50	24	2	15	9	2	0
③	正確な縫製の必要性(例えば「真直ぐ縫う」)を再度学んだ	3.69	25	1	19	6	1	0
④	素材に合った縫い方、縫い代始末の知識が深まった	3.54	24	2	16	8	2	0
⑤	表地に適した接着芯地の選択が理解できた	3.04	20	6	9	11	4	2
⑥	柄あわせが大変だった	2.58	15	11	6	9	5	6
⑦	作りたいシルエットで仕立てあがった	3.42	24	2	14	10	1	1
⑧	縫いやすさ、扱いやすさを考慮せずに、生地を選択した	3.00	20	6	8	12	4	2
⑨	ポケット、衿付けなど部分縫いの方法をしっかり理解できた	3.00	19	6	8	11	4	2
⑩	縫製技術に関する知識の不足を感じた	3.58	25	1	16	9	1	0
⑪	縫製工程が多いアイテムだった	2.62	15	11	6	9	6	5
⑫	縫製工程順を理解できた	3.23	21	5	12	9	4	1
⑬	プレス機、バキューム機などの機器を有効に使えた	3.19	20	6	13	7	4	2
⑭	ニット素材の縫製が学べた	2.65	15	11	10	5	3	8
⑮	教員の指導が理解できた	3.31	24	2	10	14	2	0

表 5.　グループワークに関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	グループ決めが大変だった	1.81	3	23	1	2	14	9
②	メンバー間の意見のまとまり、コミュニケーションがスムーズだった	3.27	24	2	9	15	2	0
③	リーダーシップをとる人間がいた	3.31	21	5	13	8	5	0
④	役割分担(リーダー、サブリーダー、フォロワー)がうまくいった	3.04	17	9	12	5	7	2
⑤	グループ内で、メンバー相互を補いあいながら作業ができた	3.00	18	7	12	6	5	2
⑥	チームワークがうまくいった	3.35	23	3	13	10	2	1
⑦	作業が特定のメンバーに集中した	2.42	13	13	4	9	7	6

①「造形演習、パターンメイキング論での知識や技術を活かすことができた」では殆どの学生がそれらの授業で得た知識を活かすことができたと回答している。②「ドレーピング演習の知識や技術を活かすことができた」に関しては、特にファッションビジネスコースの学生が選択科目であることから未履修の学生が比較的多く、そこで得た知識や技術を活かすことができたと思う学生と、そうは思わない学生がほぼ同数という結果となっている。また、今回のパターンメイキングでは中高年女性の体型での作業が中心となったため、授業で学んだ知識をベースとして新たな知識の上積みが求められたが、設問③④⑩⑮はそれらの知識や技術の修得に対して、難しかったが、今回の経験を通して得たものが多かったことを反映している回答となっている。さらに、パターンメイキングの基本事項である設問⑤⑥⑦⑧⑨に関して、殆どの学生がその重要性を再確認した回答をしている。実際の作業の中で、シーティングの地の目を正確に通さずに手間取ったケース、マーキングやトレースを正確に行なわなかったために何度も同じ作業を繰り返すケースがみられた。通常の授業の中でその重要性を再確認することが必要である。また、今回のような事業の中での制作は、授業の中で課題をこなすというだけでなく、より商品に近い形で作品を仕上げるという完成度の高さが求められる。通常の授業においてもこのような完成度を求める姿勢や緊張感を持続する工夫が必要である。⑪「工業パターンの展開(布厚みの計算、いせの配分など)が理解できた」は工業パターンを制作する際には必須の要件であることから、授業の中でまず修得しておく必要性を感じた。⑮「作りたいシルエットをパターンに表現できた」に関しては、殆どの学生がほぼ作りたいシルエットをパターンに反映させることができたと感じているが、そう思うことができなかった学生が 3 名いた。

3.4　縫製

縫製は、作品制作の過程でパターンメイキングとともに重要な工程であり、また学生らも苦労した工程である。表 4 は、縫製に関する設問と回答の結果を示す。設問①②③④に対する回答から、基本的な縫製技術が通常の授業で修得できていると思っているが、正確な縫製、素材に適した縫い方に対する知識、技術などに関して、改めて再認識していることが伺える。また⑩「縫製技術に関する知識の不

表 6.　実施してよかった点に関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	ファッションビジネスの業務の流れを体験できた	3.19	22	4	10	12	3	1
②	デザインと素材、シルエット、パターン、縫製の関係を理解できた	3.31	24	2	10	14	2	0
③	パターンの重要性を認識できた	3.73	26	0	19	7	0	0
④	グループワークの重要性を体験できた	3.58	24	2	17	7	2	0
⑤	トレンド研究、マップ制作ができた	3.42	23	3	14	9	3	0
⑥	体型理解の重要性を認識できた	3.46	24	2	14	10	2	0
⑦	正確な採寸の重要性を認識できた	3.62	25	1	17	8	1	0
⑧	岐阜地域のアパレル産業を理解できた	2.46	13	13	3	10	9	4
⑨	商品としてのものづくりを体験できた	3.23	21	5	12	9	4	1
⑩	自分に不足している知識、技術を把握することができた	3.58	25	1	16	9	1	0
⑪	自分とは異なる年齢域を扱うことで多様な志向性を理解することができた	3.23	23	3	9	14	3	0
⑫	素材知識を深め実際の企画、デザインで使うことができた	3.04	20	6	7	13	6	0
⑬	ものづくりの楽しさと厳しさを体験できた	3.54	25	1	15	10	1	0
⑭	市長賞など多くの賞を設定してもらえた	3.35	20	6	15	5	6	0
⑮	教員の指導がわかりやすかった	3.19	23	3	8	15	3	0

表 7.　今後改善してほしい点に関する設問項目と回答

		平均	思う	思わない	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
①	制作を単位化して欲しい	3.81	25	1	22	3	1	0
②	GMC のコンセプトを明確にして示して欲しい	3.62	24	2	18	6	2	0
③	審査結果の受賞理由、選外理由を明確にして欲しい	3.50	24	2	15	9	2	0
④	使える素材の多様性を確保して欲しい	3.42	25	1	12	13	1	0
⑤	作品の商品化への道筋を考えて欲しい	2.96	15	11	10	5	11	0
⑥	糸をはじめとする副素材を個人負担としないで欲しい	3.38	22	4	15	7	3	1
⑦	制作する作品の体型、サイズを統一して欲しい	3.12	18	8	11	7	8	0
⑧	作業環境を整備して欲しい(エアコンなど)	3.85	26	0	22	4	0	0
⑨	ショー発表をより多くの人々に見てもらえるよう、方法を考えてほしい	3.50	24	2	15	9	2	0
⑩	教員の指導が厳しかった	3.56	24	1	15	9	1	0

足」についても、かなりの学生がそう感じている。授業ばかりでなく今回のような機会で経験を積み上げることで、基本的な知識技術ばかりでなく、特殊な素材に対する対応やより高度な技術を得ていくことも多い。このことは、⑥柄あわせ、⑨ポケットの縫製、⑭ニットの縫製などに対する設問で、これらの工程に取り組むことになった学生は、それを経験することで知識や技術を修得したことが回答から伺える。しかし、殆どの学生がそう感じているわけではないことから、経験しなかった、あるいは自分が担当したアイテムにそれらが無い場合には全く他人事で、全体の共有経験にはなっていないことがわかる。

3.5　グループワーク

本事業を実施するに当っての、教育効果のひとつとして、グループワークと協業を通じて、専門性とチームワークの重要性を学ぶことがあげられる。今回は、テーマを決める段階からグループ作業とするために、学生を 5 つのグループに分けた。構成員は、ファッションデザインコース、ファッションビジネスコースの学生がどのグループにも所属することに留意するほかは、学生の裁量に任せた。その上で、トレンド分析、マップ制作はファッションビジネスコースの学生が、パターンメイキングや縫製はファッションデザインコースの学生がリーダーシップを取れる体制を期待した。表 5 はグループワークに関する設問と回答結果を示している。①②⑥の結果から、グループメイキングとその後の活動は、ほぼスムーズに進められたことがわかるが、グループ内での役割分担、メンバー相互の補完については、若干感じかたに差が見られる。また、⑦「作業が特定のメンバーに集中した」に関しては、「そう思う」と「思わない」がほぼ同数で、短期集中の作業だったことの影響が出ていると思われる。

3.6　総合評価

表 6 に実施してよかった点について、表 7 に改善を求める点について、設問と結果を示す。これまでに述べてきたように、当初の期待できる教育効果として上げていたのは、

(1) ファッションビジネスにおけるマーケットイン発想による企画力を高める、(2) 素材知識を深め、かつ実際の企画、デザインで使える能力を養う、(3) 自分たちとは異なる年齢域のデザイン、制作を通じて、多様な志向性、体型を理解する、(4) 地域のファッションビジネスに携わる人材との交流を通して、ファッション産業への理解を深める、(5) グループワークと協業を通じて、専門性とチームワークの重要性を学ぶ、(6) 商品化を模索し、実際のビジネスへの展開を考えるファッションビジネスの業務を体験学習する、などの点である。さらに、ファッション産業側への波及効果として、若い感性による発想・デザインからの刺激、エッセンスを実際のビジネスに活かし、固定化された「中高年イメージ＝岐阜アパレル」の図式を打開する、新しいイメージを消費者にアピールすることも期待できると考えていた。

表 6 の結果から、ほぼ上記の教育面での成果とものづくりに対する意識の向上が読み取れる。中でも③④⑤⑥⑦⑩⑬では、半数以上の学生が「そう思う」と明確に回答している。一方で、①②⑪⑫では、ある程度はそう思う、というような面も垣間見られる。事業を通じて、実際のファッションビジネスにおいて重要な要件は理解できたが、果たしてそれをこなす能力が身についたかというと、未熟であることが学生自身にも自覚できた結果であると考える。⑧「岐阜地域のアパレル産業を理解できた」ことに対する回答は、「思う」、「思わない」がそれぞれ 50%と、必ずしも学生らが理解できている状況でないことが伺える。これは、この事業を通して何が学べるのかの学生の要求に対して、産業側が単に生地を提供する、会社を訪問する、ショーを作り上げるといった表面的なことだけではその要求に応えられる明確なビジョンを持っていないことに起因する。その意味では上述(4)にあげた地域産業の理解には至らなかったともいえる。

表 7 は、事業の成果について検討してきた中で浮かび上がってきた課題をまとめた結果になっている。⑤「作品の商品化への道筋を考えて欲しい」では、「思う」15 名(58%)、「思わない」11 名(42%)という結果で、前者 15 名のうち 10 名は「そう思う」と回答している。表 6 の⑨の回答とも関連しているかもしれないが、事業に関わった学生なら商品化への展開は企画制作のモティベーションに繋がる重要な要素であると考えていた筆者には、「思わない」の回答率が思っていた以上に高かった。実際のファッションビジネスの手法に沿った企画、商品としての衣服の製作を追体験してきた先には、商品が実際のビジネスの中でどのように受け入れられるのか、消費者は受け入れてくれるのかという評価が必要である。ファッションショーで評価を下した審査員の意見がそれに相当するとも考えられるが、学生には、もっと最後まで見届けたいと思わせるような、事業に対する取り組み姿勢のあり方をわれわれと共有できる指導や導入が必要である。その意味では、地域産業の軸である中高年世代の婦人服を取り上げる「岐阜マザーズコレクション」は対象としては適している。しかし、コンセプトの設定段階において、産業側の主張を期待し、期待通りの答えが返ってこないと嘆くのではなく、そのステップそのものから、提案していくことに事業の目標を設定していくことが必要である。

4. まとめ

平成 23 年度当初から、(社)岐阜ファッション産業連合会青年部の主催で、ファッションデザイン専修の学生と取り組んできた「第 2 回岐阜マザーズコレクション」を、ファッションデザインおよびファッションビジネス教育のカリキュラムとの関連の中で考察した。本事業は、まだ専修教育の中にしっかりと定着している状態ではない。短期大学という限られた時間の中では、学生が実務経験を積むために学外へインターンシップに出かける期間は非常に限られている。こういう状況の中では、カリキュラムと並行して本事業のような実務に近い経験を積むことができることの意味は大きい。しかし、産学協働事業の実施にあたっては、単なるイベントに終わってしまうことのないように産学のコンセプトや到達点を明確にし、それを学生指導やイベントのあり方に反映させることが必要である。アンケート結果にも、学生には「仕方なくやっている感」や「負担感」が見え隠れしている。今回の事業成果と、本報も含めたその後に行なわれた多面的な評価を今後の取り組みに活かしたい。

謝辞

アンケート調査に協力してくださった生活デザイン学科ファッションデザイン専修 2 年生に感謝します。

文献

1) 平川すみ子、「産学連携による産地再生の試み」、岐阜市立女子短期大学紀要第 61 輯、p. 99-104(2012)
平成 22 年度後期、平成 23 年度前期授業アンケート結果

（提出日　平成 24 年 1 月 11 日）